

奥の細道むすびの地「大垣」 十六万市民投句

一般の部

令和七年一月度 入賞句一覧

投句数 五百四十七句



特選

度会 さち子 選

一茶忌や子の背丈なる投句箱

埼玉県川口市 吉永 寿美子

小林一茶の忌日は旧暦の十一月十九日。芭蕉、蕪村とならぶ江戸期の俳諧師。後年には故郷の柏原に戻り、五十二歳で結婚。四人の子どもを持つが、いずれも次々に幼くして亡くしている。そんなこともあつてか「雪解けて村いつぱいのこどもかな」など、一茶には子どもを題材にした句も多い。掲句はそんな一茶忌にかなう句。背伸びして投句する子どもたちの様子も見えてくる。

年とりて何ごともなし鳩の群れ

大垣市 水谷 義雄

きつと琵琶湖であらうか。波にまかせながら浮かぶ鳩の群れを眺め佇む。晩年のおだやかな一時。鳩を見ながら、きつと来し方の様々なことも思い浮かんだらう。「なにごとともなき」の措辞は、鳩の群れの様子であり、作者の現在の心境であらう。晩秋の空、それを映した秋の日のきらきらした湖。そんな光景もうかぶ。

支ふれば妻の軽さや冬の蝶

各務原市 能登 航

妻と歩いていたのだらうか。その妻は病後であつたのか、あるいは老年か。そんな妻に添いながら歩く作者。あらためて妻の軽さに驚く。その作者の目の前をよぎる冬の蝶。弱弱しくもあるが、精一杯羽ばたこうとしている蝶。そんな蝶に妻もかさなるか。晩年を迎えた夫婦の一コマ。詩情がある。

秀逸

放課後の図書館ポインセチア燃ゆ

大垣市 遠藤 加容子

軒下の干柿すだれ陽をはじく

大垣市 石垣 珠泉

寄鍋に和みてくずす膝頭

安八郡輪之内町 野村 照子

ふる里は藁の温もり注連作

大垣市 小林 研

初夢や吾より若き妣に会ふ

大垣市 安田 むつこ

冬ぬくしおしやべり好きな手話の指

東京都世田谷区 関戸 信治

白木蓮まだ少年の喉仏

養老郡養老町 佐藤 咲楽

編み直すセーター恋も新しく

兵庫県姫路市 三木 崇弘

黒傘のいつぽん残る忘年会

東京都足立区 山崎 董久

サスペンスは佳境蜜柑は持ったまま

広島県福山市 中常 かつたろー。

入選

小六月キツチンカーに人の列

本巢市

小泉 裕子

落柚子を湯舟に浮べ湯のほてり

不破郡垂井町

児玉 昌巳

アルプスの稜線淡し冬の靄

不破郡垂井町

久保田 紘義

柵の花門前の仄灯り

大垣市

久保田 悟義

百歳の恙なき日や福寿草

大垣市

白井 秀子

近道の迷ひ道なる夕時雨

養老郡養老町

田中 紫香

実南天雨滴をとどめひかりけり

大垣市

浅野 翔泉

工場のけむり真つ直ぐ初出勤

大垣市

北村 征子

仏にも好みの箸と冬至粥

安八郡輪之内町

野村 照子

久々の訛飛び交ふ女正月

大垣市

和田 勝子

枝先のまだ揺れてゐる鴟の贅

揖斐郡揖斐川町

栗野 みねお

極月や時の足音風の音

大垣市

吉田 てるみ

初茜片目の灯る仁王像

本巢郡北方町

谷 弘行

長良川抱える如く冬の虹

瑞穂市

谷 牛歩

月冴へて連山黒き飛驒の里

各務原市

能登 航

選者吟

正月の雨の一日は詩によひ

さち子



一般の部